

第21回「日韓高校生交流キャンプ」参加生徒の感想文 ⑥

「第21回日韓高校生交流キャンプの感想文」

金 承研(キム・スンヨン)

善隣インターネット高等学校 2年



誰よりも充実した日々をしたいと心に決めていた夏休みの始まりを、「日韓高校生交流キャンプ」への参加とともに迎えた。気が付くと金浦空港に着いていて、そこで、事前説明会で挨拶を交わしたハナ、イエリン姉さん、ダン、カカオトークを通してメッセージを交わしただけのヨンソン兄さんと合流した。そして誰よりも優しくそうな顔のチーム3のメンター、アルム先生とも顔を合わせた。

キャンプ期間中、「ビーグル3匹」というあだ名で呼ばれた同じチームの女子メンバー、ハナとイエリン姉さんとは金浦空港で少し話をしたが、ダンとヨンソン兄さんとは一言も交わしていなかったので、これからの4泊5日間の心配になった。耐えられない程気まずい雰囲気になったらどうしよう、と不安も募った。そんなぎこちない雰囲気の中、2時間の飛行を経て、日本に到着し、そのままキャンプ会場へ移動した。日本の参加者たちがキャンプ会場で私たち韓国の参加者を待っていると言われた。心

配半分期待半分でキャンプ会場に入っていくと、溢れんばかりの拍手と共に日本の学生たちが私たちをあたたく迎えてくれた。同じチーム3のチームメートのカリン、サキ、マナ、ユウタ、コウヘイと挨拶を交わしたが、何だかまだぎこちない雰囲気のままオリエンテーションが始まった。

オリエンテーションが終わってから、部屋にスーツケースを運んだ。私のルームメートは、私より一つ年下の可愛らしい顔のカリンだった。今だから言えるけど、初めてみんなと顔を合わせた時からカリンの第一印象がとても良かったので、カリンとルームメートになれたらいいなと思っていた。そう思っていたカリンと本当に同じ部屋を使うことになって、とても嬉しかった。カリンと二人で話をしながら部屋に向かう間、もし仲良くなれなかったらどうしようと心配したが、思った以上に話が弾んで、私と気が合いそうだったのでほっとした。

夕食後、チームマガジンを作った。うち

のチームは花をテーマに、チームメンバーの一人一人を花びらに見立てたチームマガジンにした。チームメンバーのだれもが熱心に意見を出して、またメンバー同士で良く団結できていたので、これからの4泊5日間がとてもうまくいきそうな気がした。そして、私の予想通り、うちの「ドキドキ」チーム3は本当に最高のチームだった。

二日目は、朝食を食べ終わるや否や、電車に乗り込んで高輪プリンスホテルに向かった。移動中の電車の中で、日本と韓国のメンバー全員で、韓国のゲーム(ティンティン・テンテン・フライパン)をして遊んだ。ゲームの途中、可笑しな罰ゲームを課したり、受けたりするうちにお互いにすっかり打ち解けてしまい、一緒に笑って一緒に楽しむようになった。とても愉快で、チームメンバー一人一人がより好きになった。

高輪プリンスホテルに到着して、ホテル事業についての講話を聞いたり、職員の方々にインタビューをしたりした。正直、今までの私はホテルの経営やサービスについてほぼ無知の状態だったので、知らなかった様々なことについて分かるようになり、興味を持つようになったとても貴重で充実した時間を過ごせた。特にインタビューに応じて下さったコックさんの並外れたカリスマ性がとても印象深く、いまだに記憶に残っている。

昼食後、ベットメイキングの体験と日本伝統の茶道である茶の湯の体験をした。その中でも特に記憶に残っているのがベット

メイキングの体験で、これはほぼ「芸術」と言ってもいいほど、ものすごい技術と時間、努力が必要な作業だった。ホテルの職員の方に教えてもらいながらベットメイキングを直接体験してみたが、うちのチームの出来栄が他のチームより良かったと言われた時には、本当に嬉しかった。

体験が全て終わり、キャンプ会場に戻る電車の中で、今度は日本のゲームを教えてもらって一緒に遊んだ。韓国の「ヌンチ・ゲーム(センス・ゲーム)」に似ていて、私の記憶している発音が正しければ、「タケノコ タケノコ ニョッキニョッキ」といって、「竹の子が育つ」という意味だと教えてもらった。このゲームをやりながらみんなとより一層仲良くなることができた。たったの一日でチームのみんなと仲良くなることなど不可能だと思っていたが、実際この日、みんなと打ち解けることができたので本当に嬉しかった。

キャンプ会場に帰着してから、懇談会、夕食、ゴールデンベルの順にプログラムが進められた。ゴールデンベルでは、マナコという同い年の子とペアになった。マナコは活発な性格の持ち主で、私たちはすぐに意気投合した。残念ながら私たちペアは、優勝を逃してしまったけれど、素敵な友人が一人増えたことだけでも本当に嬉しかった。また、チームメートのハナと隣のチームのコウキペアが優勝したので、嬉しさは倍になった。

ゴールデンベルの後、私たちは事業アイテムを確定するため、一つの部屋に集まって楽しく会議を進めた。うちのチームは、

「ユーザのニーズに合わせた旅行アプリケーション」を事業アイテムとして確定し、熱い話し合いを繰り返し広げた。話し合いの後、解散し、各自眠りについた。みんなの心を一つにして、一人ひとりが出してくれた斬新なアイデアをチーム一丸となってまとめてみると、かなり具体的で素晴らしい事業アイテムが出来上がった。そんなふうに二日目過ぎ、三日目を迎えた。

三日目は、一日中事業ブース作りをした。最初は、真っ白なブースを目前に、漠然としていたが、次第に事業名も決まり、必要な備品も揃って、各自役割を分担して一つ一つ作業をこなしていくうちに、真っ白だったブースがどどんうまっっていった。もちろん躓いたときだってあるけれど、うちのチームは素晴らしいチームワークを見せながら各自自分の役割を着々と果たしていった。

特にうちのチームの事業アイテムはアプリケーションだったので、紙に大きく実際のアプリケーションの画面を描くことにしたが、これが本当に大変な作業で、完成するまでかなりの時間がかかってしまった。私は、コウヘイと一緒にアプリケーションの「マイページ」部分を担当した。しかし、作業の途中でコウヘイがミスをして、最初からやり直さなければならなくなった。そのおかげで、私はコウヘイと特に親しくなることができ、同じ作業を二回繰り返してやったので、よりクオリティの高い画面を描くことができた。それから「マイページ」は、コウヘイと私の合言葉になった。

もう一つ印象に残っているのは、事業ブース作りの途中、会場の外に必要な備品を買いに行くチャンスが私にめぐってきたことだ。私はサキと一緒に会場近くの百円ショップと文房具屋さん、そしてスーパーマーケットに行った。全体的な雰囲気は韓国と似ていたけれど、直接日本のお店に行ってみることができただけで、一つ一つが珍しくて楽しかった。

この日、事業ブースの完成後も、私たちは寝ることができなかった。発表の準備、UCCの撮影と編集などまだやらなければならないことが山積みだったからだ。私たちは畳の部屋に集まって、打ち合わせとUCCの撮影を済ませた。その後、イェリン姉さんとマナの部屋に移って、残りの作業を片付けた。朝日が昇るのを見ながら眠りにつき、2時間だけ仮眠をとった。

この三日目の日が一番疲れて大変な日だったけれど、一番記憶に残っている日でもある。私たちは一つになって、事業ブースを飾り、UCCを撮影し、ノボリとパンフレットを作った。そんな慌ただしさと疲れの中、私たちの友情はより深まって行き、日韓の国籍にかかわらず、みんなで仲良くなることができた。韓国に帰ってきてからも一番記憶に残っているのは、何よりも大変だったこの三日目の夜である。それは、私たちの熱い情熱が輝いた日だったからではないだろうか。そして、決戦の日がやってきた。

四日目は、目が覚めてから朝ごはんも食べられずに、すぐさま残りの準備に取り掛かった。真の決戦の日、私たちの事業を投資家の方々に披露し、(模擬)投資金を募る日がやってきた。開始前、約一時間をかけて、前日までにできなかった作業を済ませ、チームメンバー全員で気合を入れ直した。いよいよ模擬投資が始まった。

思った以上に日本人の投資者の方が多く、私が説明できたのはたった一人だけだった。それからは、イエリン姉さんと一緒に投資家をブースに招く広報の役割に徹した。前日、力を込めて作ったノボリを手に、ティッシュと飴玉を配りながら、大きな声で「旅に出かけませんか〜。」と叫んで歩き回った。すると一人二人興味を示してくれたので、そのチャンスを逃さずに、すかさず私たちの事業ブースへと案内した。事業ブースでは、日本のメンバーたちが誠心誠意説明を行い、結果、投資を誘致できた時には、投資家の一人ひとりに「パンパンパン」と感謝の歌を贈った。説明をするという役割こそ果たせなかったものの、心残りもなく充実感でいっぱいになった。事業ブース発表会が始まる前までは、体がくたくたに疲れていて、うまくやり遂げられるかどうか心配だった。しかし、いざ始まると、会場の物凄い熱気に圧倒され疲れなんか感じる間もなく、一人、二人と投資家の方から投資契約書に署名をもらう度に天にも昇りそうな喜びに包まれた。

そして表彰式、私たちのチーム「Pit-a-paTRIP」は堂々と創業振興院長特別賞に選ばれた。最高に幸せな瞬間だった。

チームメンバー一人一人の苦労が実を結び、輝く成果をもたらしたのだと思った。うちのチームは、団結力だけが一番だと思っていたので、メンバー全員チームワーク賞を期待していた。しかし、それよりも良い賞を受賞できたので、これ以上嬉しいことはなかった。チームメンバー一人一人に心から感謝すると同時に、こんなに素晴らしいチームメンバーに巡りあえたことを物凄く幸せに感じた。

表彰式の後には、別れの瞬間が迫ってきているとことを実感してしまった寄せ書きの時間、なんだかディナーショーのような雰囲気だった特技披露の時間、ユウタと一緒にコンギノリ(お手玉遊び)をして遊んだ両国伝統遊びの時間が過ぎ、私たちが一緒に過ごす最後の夜がやってきた。最後という言葉は何時だって人の心を複雑にしてしまうようだ。淋しさなのか、悲しみなのか、清々しさなのか良く分からない気持ちはさて置いて、私たち10人は一つの部屋に集まって、ゲームなどをして楽しく遊んだ。

韓国に戻ってきて一週間が過ぎた今も、その夜のことを思い返すと楽しい気持ちになったり懐かしい気持ちになったりする。そしてチームメンバーの顔が一つ一つ思い浮かぶ。そんなふうに私たちは私たちの最後の朝を迎えた。

最終日、私たちは「小江戸」という街に繰り出した。ひどく暑かったことが一番記憶に残っている。お土産やさつまいものソフトクリーム、そして大きな種も覚えている。でも、何といても忘れられないのは、

私たちが別れたあの瞬間のことだ。観光の時間が終わり、集合場所の駐車場に辿り着くと、私たちを乗せるであろうバスが目に入った。そこで私たちは突然のお別れをしなければならなかったし、その事実がとてつもなく悲しかった。私は元々情が移りやすく涙もろい性格なので、お別れの瞬間、止めどなく涙が溢れ出てしまった。実は前日の夜から変な気持ちになったりふっと涙が流れてしまったりしたが、本当のお別れの瞬間になった時には、号泣してしまった。特に日本のメンバーたちとは頻繁に会うことができなくなるのがたまらなく悲しかった。また、ルームメートの次に仲の良かった日本の友達、ユウタが泣いている姿が目に入ると何倍も悲しくなった。私が号泣し

たことで有名になってしまった。号泣している写真もたくさん撮られてしまって、より悲しかった(笑)。

カリン、ユウタ、コウヘイ、サキ、マナ、そしてハナ、ダン、イエリン姉さん、ヨンソン兄さん、みんな一生忘れられないと思う。キャンプの間ずっと、本当に幸せだった。また、充実した夏休みにすると決めていた私の目標も半分は達成した気がする。キャンプからとても多くの物を学んで、感じて、友情を深めることができた。韓国の仲間、日本の仲間、みんなこれからも末永く連絡を取り合い、みんなで再会する日が必ずくることを信じてやまない。

「このキャンプで得たもの」



猪狩 陽三郎
市川学園高等学校 2年

僕はこのキャンプでとても成長しました。今まで韓国の事はあんまり好印象ではありませんでした。それは日本のメディアは、韓国人は全員が反日感情を持っているような報道ばかりしているからです。この情報を信じていた僕はこのキャンプで驚くべき体験をしました。

キャンプ一日目はとても緊張していて、仲良くなれるかととても不安でした。けど同じチームの子が喋りかけてくれて助かりました。こういうところで社会的になれる人間はすごいと思います。自己紹介などが終わり、企業案などを決める時間にみんな

仲良くなり、友達作りプログラムの時はもう冗談を言い合っていました。

僕たちのチームのやるべきことがはっきりとして、深夜2時ごろまで話し合いました。驚いたことにこのキャンプは就寝時間の設定がなくて、なぜかなと思っていたらやるが多過ぎて寝られないからでした(笑)。そのおかげで、連続で徹夜をすることになりましたが、みんなとずっと議論しながらだったのでとても仲良くなれたし、濃い時間を過ごすことができました。

企業のプロジェクトで、日韓関係について色々調べながら議論したため、意見がぶつかることもありました。それを乗り越えて絆を深めたため、僕たちはチームワーク賞を取ることができました。本当に嬉しかったのですが、4人も表彰式に寝坊してしまい、みんなで受賞することはできませんでした。

少し後悔したことは、韓国語を勉強していかなかったことです。キャンプに参加する前は通訳に頼めばいいやと思っていた

のですが、やっぱり自分で話した方が仲良くなれるし、向こうが少し日本語を話せたりするのにこっちが韓国語を話せないのは不甲斐ない気持ちでいっぱいでした。

このキャンプで得たものはたくさんありますが、一番素敵なものは友達です。今までの人生で友達は少なくなかったのですが、たった五日間の交流なのに、別れのときは涙を流すほど悲しかったです。

特に韓国メンバーは本当にとっても面白くて優しかったです。最初のイメージはメディアに作られたものだとわかりました。このことは僕達が周りに教えることが必要だと思いました。

また地方にいるメンバーとも遊ぶ計画をしたりしています。

ここでの経験は人生の財産になり、また、友達は一生付き合っていこうと思える最高の人達でした。このキャンプは忘れられないものになりました。

「第 21 回日韓高校生交流キャンプの感想文」

金 睿璘(キム・イエリン)

忠南発酵食品高等学校 2年



2014年7月27日、朝から心を弾ませながら地下鉄に乗り、金浦空港に向かった。空港の集合場所に集まり、チーム毎に出国手続きを済ませ、搭乗時間を待った。待っている間、チームメンバーの間には、ぎこちない空気が漂っていた。そんな雰囲気を一変させようと、メンターさんの提案で自己紹介を行い、少しながら雰囲気が和んできて、時間が経つにつれメンバー同士もお互いに心を開くようになった。

飛行機に乗って、約2時間後に羽田空港に到着した。団体バスに乗り換えキャンプ会場に向かいながら、早く日本の参加者たちに会いたいと思った。しかし、いざキャンプ会場に到着すると、言葉にはできないほど胸が高鳴り、緊張感が高まってきた。会場に入場する時は、みんなが笑顔で迎えてくれたので、とてもありがたく嬉しかった。

初日は、チームのスローガンとチームマガジンを作ることで短い一日が終わり、ルームメートとぎこちない初めての夜を過ごした。

二日目は、品川のプリンスホテルに出かけて、講話を聞いたりホテルの職員の方々にインタビューをしたりした。また、日本の伝統茶を飲んでみるなど普段できない珍しい経験もさせてもらった。その間、突発的に出題されるミッションは、クリアするためにチームメンバーたちと楽しい時間を共有できたので、とても良かったと思う。

この日の夜に行われた「ゴールデンベル」では、最後の3チームにまで残って奮闘したが、優勝はできなかった。しかし、とても楽しかったので、悔いはなかった。

三日目は、事業ブースについて話し合い、ブース作りに没頭した。一日中、話し合いや切り貼りして事業ブースを飾る作業に夢中になっていたが、途中必要な備品を買い揃えるために会場の外の文房具屋さんまで出かけるチャンスがあって、束の間の見物ができた。また事業ブース作りをしながら日本のメンバーたちともたくさんお話しをして打ち解けることができた。この日は、本当に大変な日だったと言えるほど、メンバーのみんなが精一杯頑張って作業に取り

組んだし、夜は一つの部屋に集まって、メンバー同士で説明する様子を見合いながら、窓から朝日が昇ってくるのを目にした。私の人生の中で一番熱心に夜を明かした日ではないかなと思う。

そして待望の四日目、私たちは2時間の睡眠をとって、どうすれば投資家の方々からより多くの投資金と支持を募ることができるかについて考えた。それからファイト！と気合を入れて、発表会の開会宣言と同時に喉が枯れるほど一生懸命事業ブースを宣伝してまわり、集まった投資家の方々に事業内容について説明することを繰り返した。私は一度も説明をする役には就かず、事業ブース宣伝係を務めていたが、たくさんの投資家をチームの事業ブースへお招きすることができたので、満足した。

その後、昼食を食べてから表彰式が行われたが、なんと私たちのチームは2位に選ばれた。みんなびっくりすると同時に喜びを分かち合った。表彰式と修了式の後、寄せ書きと記念写真撮影、それから夕食を兼ねた特技披露、両国伝統遊びが続いた。両国伝統遊びの時には、日本の友達にコンギノリ(お手玉遊び)を教えながらとても楽しい時間を過ごした。

最終日、もうすぐお別れだということなどちっとも実感できないほど、みんなと一緒にいるのが当たり前のように感じられた。観光をしながらもこの後みんなとお別れだという思いは全くせずに、蒸すような暑さにも関わらずみんな笑顔で楽しく見物をし

たり、写真を撮ったり、話を交わした。

短い観光時間が終わり、メンターさんに指示された集合場所に集まった。しかし、そこがお別れの場所だとは思ってもしなかった。「何だろう」とぼっとしていると、メンターさんからこれからお別れの時間だと言われた。それまではただ寂しい気持ちでいたのだが、お別れの挨拶を交わすために仲間たちの名前を口にして、ルームメートの顔が目に映った時には、思わず涙が溢れ出てしまった。開会式の時、日韓経済協会の専務理事が「最終日、お別れの時には、涙を流す」と言っていた意味がよく分からなかったが、本当に会えなくなるのだと思うと止めどなく涙が流れた。

いつ再会できるか分からない仲間とお別れが悲し過ぎて、ほとんどの参加者が泣いていたと思う。しかし、みんなそれぞれの家に帰るために悲しいお別れを受け入れるしかなかった。一緒に過ごした時間がたったの4泊5日だけだとは信じられないほど私たちは打ち解けていて、仲良くなっていた。いつになるか分からない再会を約束して、家に帰る間にたくさんのことについて考え、気付くことができた。そして、このキャンプに参加できて本当に光栄だと思うし、高校3年生の最後の思い出の中、このキャンプでのことが一番記憶に残るだろうと思った。

最初は、拙い日本語で日本の参加者たちと言葉を交わしていると、気後れしたり不安に襲われたりしたこともあった。しかし今は、思った以上に楽しく愉快的な思い出を

作ってくれた仲間たちとキャンプの関係者の方々に感謝の言葉を伝えたい。本当に素敵な思い出ができたし、一生忘れることはできないと思う。これから日韓高校生交流

キャンプがより広まって、多くの韓国と日本の高校生が良い経験をして、楽しい思い出をたくさん作れたらいいと思う。

